=市史編さん便り=　【20 号】 令和 4 年 7 月 11 日(月) 発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

◎土佐ジョン万会記念講話を実施！

演題「生死の大海を乗り越えて咲く万次郎」　田村公利

過日 7 月 9 日(土)、高知市鳥越 1-1「健康カフェとりごえ」1 階ホールにて「令和 4 年度土佐ジョン万会総会」が開催されました。

内田泰史会長のあいさつから始まり、令和 3 年度事業報告並びに決算・監査報告、令和 4 年度事業計画・予算書が承認された。

令和 4 年度事業計画は、下記の①～⑤のとおりです。

①第 7 回ジョン万次郎英語弁論大会(高知県人権啓発センター6 階・8 月 27 日土曜)。
②ジョン万サミット（土佐清水市、11 月 12 日土曜、現地開催と web 開催の併用)。
③ミュージカル「ジョン マイ ラブ ―ジョン万次郎と鉄の 7 年―」(坊ちゃん劇場)の趣旨に賛同し、特別協力団体として協力する。
④ジョン万次郎出航記念碑の建立（設置場所・土佐市宇佐に設置)。
⑤ＮＰＯ法人「中浜万次郎国際協会」との連携・協力。
・「ジョン万次郎資料館」の高知市への設置。
・ユネスコ無形文化財への登録（150 年以上続く、中濱家とホイットフィールド家の交流を無形文化財として申請・登録をめざす。

《田村公利講話》「生死の大海を乗り越えて咲く万次郎」の概要

・自己紹介と土佐清水ジオパークが日本ジオパークに認定されたこと。
・少年時代の万次郎は、老役・今津家に奉公していたこと。山城屋を中心に親方・納屋主、船頭、船子・納屋番師と縦社会であり、万次郎はその中で一番弱い立場に立っていた。しかし、反骨精神だけは心の芯に座っていた。
・44 歳までの万次郎と、それ以降 71 歳までの万次郎は、「動」と「静」であった。44 歳以降の万次郎に

どのような心境の変化があったのか。

- 最初の妻「鉄」と万次郎の結婚生活は僅か７年。この間『ボーディッチ航海書』翻訳、『英米対話捷径』執筆、咸臨丸での米国渡航、捕鯨指導に箱館赴任、小笠原諸島等々、八面六臂の活躍を行う。その多忙の万次郎を支えたのは、妻鉄であった。
- 明治８年7～8月の万次郎＆東一郎が、母であり祖母である志ヲの生活する中浜に帰郷したときのエピソード。
- 万次郎最期の１日（臨終の日）のエピソード（『中浜東一郎日記』の記述から）。
- 土佐清水市史編さん事業の紹介。

万次郎は、父、妻等の身近な人の死に立ち会いながら、万次郎は自分の死とも向き合っていた節がある。避けては通れぬ死を前に、私たちはいかに生きるべきか。どう魂の炎を燃やし、完全燃焼の人生を歩んでいくか。万次郎は、そのことを 124 年の時空を超えて私たちに語りかけてくる。

郷土学習資料（３）―窪津浦での捕鯨〈後編〉―

（３）鯨組が窪津周辺に残した近世石造物

ここでは、室戸方面の津呂組・浮津組が足摺半島に所在する寺社に寄進した近世石造物を紹介したい。自然相手の漁であり、クジラの回遊を待つことは、かなり気長い忍耐が必要だったことだろう。そんなとき彼らは不慣れな土地で何を考え、どのように過ごしたのだろうか。命をかけた海での鯨との格闘は、強いストレスがあったに違いない。安全や豊漁、時には家族の健勝と安穏を窪津周辺の寺社に熱心に祈念したものと思われる。ここではその代表的なもの３基を紹介する。

次頁の写真１右は、津呂（室戸方面の津呂ではなく窪津近郊の集落）に所在する金比羅宮門前に配置されている一対の石灯籠（両方とも高さ約 163 センチメートル）である。本殿に向かって左手の石灯籠の宝珠の部分が新造されている。正面に「安喜郡

元村住士　奥宮三九郎正敬建之　文化十五年年正月吉日（1818）」とある。建立者奥宮正敬は6代目・元奥宮家当主で鯨方津呂組の頭元として活躍し、後に知行250石取りに出世した人物である。

写真1左は、真言宗豊山派神楽山海蔵院の境内にある浮津組鯨方によって文化２年（1805）に寄進された花崗岩製の石灯籠（高さ約148センチメートル）である。恐らくは一対で寄進されたと思われるが1基しか確認することができなかった。

（写真1）左・窪津海蔵院の浮津組寄進石灯籠と右・津呂金毘羅宮の奥宮正敬寄進石灯籠

写真2は、明治10年（1877）に38番札所・金剛福寺九輪宝塔堂再営の時の高額寄進者の氏名を刻んだ砂岩製の板碑である。中浜浦・五代目山城屋の山﨑文治郎（150円）、松尾浦酒屋・袋屋の上原清八（100円）、松尾浦廻船商人吉福屋・吉福嘉太郎（180 円）など鼻前七浦で江戸時代末に活躍した廻船商人たちの板碑は目を引く。当時1円は現在の２万円ほどである。

この中に土佐国安藝郡浮津村捕鯨社中（50円、高さ約105センチメートル）、土佐国安藝郡津呂組捕鯨社中（80円、高さ約108センチメートル）の板碑がある。この時、現在の貨幣価値に換算して浮津組は100万円、津呂組は160万円ほどを寄進している。鰹漁と捕鯨は江戸時代を通じて土佐国の花形産業であった。ほかにも鯨方に関係する近世石造物は何基か存在するが、紙面の関係からこれにて留めておく。

（写真2）金剛福寺九輪宝塔再営寄進板碑
左端が津呂組、中が浮津組の板碑

（4）近代窪津鯨漁場紛争

明治8年（1875）に明治政府は、沿岸漁場を国有とし、新たにこれを賃借する権利を布いた。これを期に捕鯨に関しての積年の悲願を叶えようと窪津海民は激しい漁場獲得運動を県庁に展開した。

しかし、時の県権令・山崎長武の回答は、極めて無責任な内容であった。浮津・津呂の室戸方面鯨組と協議して再度願い出よとの趣旨であった。その話し合いが妥協点を見出すわけはなく決裂した。ここで窪津海民の怒りは頂点に達した。その矛先は室

戸方面鯨組に向けられ、納屋への妨害、鯨漁場へ漁網を敷設するなどその行動はエスカレートした。この対立は、皮肉なことに窪津集落を二分する結果となった。鯨場反対派と賛成派に分かれたのである。

窪津海民の生活は、夏場はカツオ船に乗りカツオ漁に従事した。女は納屋で働いた。当時は、窪津浦に 6 隻のカツオ船があり、1 隻に 18 人乗船できた。約 100 人弱の海民が乗船してシーズン制のカツオ漁に従事していた。冬場は、室戸方面鯨組に雇われて、クジラの陸揚げ・解体・骨切りなどの労働を行った。1 日玄米 2 升の賃金であり、下宿収入と合わせて冬場の唯一の収入源であった。鯨組の下宿は窪津浦の広小路から下にあり、クジラ船 1 隻 10 人につき 1 軒の 32 軒あった。下宿代は、出漁期間中 1 軒につき米 4～5 俵であった。

鯨場賛成派の人々は、冬場の現物収入をもたらす室戸鯨組の側に立った。生きていくための選択であり、それは仕方ないことだった。これまで経済的自立を阻害され続けた窪津海民にとってまず生きることが第一であった。

このような険悪な対立の続く中で室戸鯨組屯所は以布利ホオノコに移転した。この間、窪津海民は懸命に出漁して漁獲を続けたが冬場の漁業制限は、その生活に影を落とした。今度は窪津で鯨組の復帰運動が起こった。移転先の以布利でも窪津への復帰に反対した。このような混乱が数年続いた。明治 20 年（1887）、鯨組屯所が窪津に復帰した。

その後も鯨組と窪津や以布利の地元海民との争いはあったが、明治 40 年（1907）にノルウエーに発注していた動力銃殺捕鯨船「第二大東丸」が高知港に入港し、室戸方面鯨組は、窪津浦をようやく明け渡したのである。天和 3 年（1683）から明治 40 年（1907）までの 255 年間の窪津海民の悲願は遂に達成された。しかし、この技術革新は、クジラの進路で待つ捕鯨から、クジラを追う捕鯨へと変化をもたらし、必ずしも窪津浦を拠点とする必要がなくなった。これ以降、地域の捕鯨の拠点は、港湾整備が進みつつある清水港に移されることとなる。

（5）土佐清水市域の海域「クジラ一頭で七浦賑わう」

平成 10 年代頃より窪津漁協は、魚の直売所や大漁屋（食堂と直売所）などの経営、大敷定置網の体験学習、都会からの修学旅行生の誘致活動等の新たに活路を求めようとする各種の工夫した取り組みは目を見張るものがあった。しかし、独自の道を模索した窪津漁協ではあったが体制が変わり、現在、高知県漁業協同組合に所属している。大漁屋の食堂は廃止され、直売所も民間企業に引き継がれた。

江戸時代に足摺半島北部・窪津浦で行われてきた捕鯨について考察してきた。一見、カツオ漁、イワシ漁、捕鯨の 3 者は個別の事象であるように感じられるが、実はそうではなく、3 者の間には密接な関連性があった。イワシとカツオ及びクジラは食物連鎖の関係でつながっている。カツオが餌イワシを四方から襲うと、イワシが密集して餌床ができる。それをカツオは群集して補食する。その逃げまどうイワシをクジラが横から飲み込む。俗に「クジラ一頭で七浦が賑わう」とは、クジラの到来が餌イワシやそれを追って群集するカツオを沿岸にもたらすことを意味する。このような貴重な海産資源を藩や他浦海民に収奪されたところに地域住民の悲劇があり、貧窮があった。その歴史を覆すかのように近代以降の窪津浦の漁業は発展していくが、少子高齢化・過疎化の波が影を落としている。（完）